OUKA
The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	書陵部所蔵『資賢集』の成立
Author(s)	三村, 晃功
Citation	語文. 1981, 38, p. 39-48
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/68677
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

書陵部所蔵『資賢集』の成立

三村晃功

一

「従三位源有賢男。按察使から権大納言に至り、養和二（一一八二）出家。郢曲・笛・和琴をよくし、後白河院近臣として活躍したため、治承三年（一一七九）年清盛のクーデターでは解官され丹波に追放された」（『私家集大成2』の解題）源資賢（一一一三～一一八八）に、家集の存することは周知の事実に属するが、その資賢の名を冠した私撰集が宮内庁書陵部に所蔵されている。すなわち、『資賢集』（一五五・三九）が当該書で、本集はつとに、「中世私撰集解題（その二）」（『和歌文学研究』第十五号、昭和38・7）で、橘本不美男・八嶋正治の両氏によって紹介され、このたびは『図書寮叢刊　資賢集　遺塵和歌集』（昭和52・3）として、詳細な解題と上下句索引を付して翻刻、刊行されて、容易に利用することが可能になった。

と同時に『資賢集』の内容についても、同書は詳細な調査結果を報告しており、同書の『資賢集』の研究に資する役割ははかり知れないものがある。そこで、橘本・八嶋両氏の御研究によって明白になった成果に導かれて、『資賢集』に言及するに、まず、本集の書誌は次のごとくである。(1)

宮内庁書陵部蔵。袋綴三冊。二七・三×一九・五糎。表紙は金茶色鳥子紙。題簽「資賢集上（中・下）」。端作は題簽と同一であるが、上巻のみ「按察使大納言資賢朝臣撰集」とある。近世初期写。本文用紙は楮紙。上巻は墨付七十三枚、中巻同じく七十三枚、下巻は六十八枚である。一面十行、一首は一行書きであるが、各冊、巻末近くなると、行間の補入歌が目立つ。三冊共、一丁オ、並に最終丁オに「阿波国文庫」の印記を持つ。すなわち、旧阿波国文庫蔵。

収載歌数は、歌を欠落して歌題のみの部分や、行間の補入歌も算入すれば、春四五七首、夏二三七首（以上上巻）、秋五四三首、冬二〇二首（以上中巻）、雑三五三首、恋三六四首（以上下巻）で、総数二一五六首。出典資料としては、「『明題和歌全集』、『古今和歌六帖』及び、俊恵・頼政・好忠の各家集を主要な出典として」おり、「この五集で、2114首、全体の98％を占めている」。「成立は、ほぼ『明題和歌全集』成立時点から孤本である本書の書写された江戸初期迄の間となろう。当部蔵本は一見写本とも思えるが、（中略）原本とも思われる徴証を多く見出すことが出来、（中略）原本と見た場合、何度目かの編纂を終えた中書本形態と推定され、写本と見

た場合は、書写者自身が出典を知り、それを手許に置いて書き入れた形態の本と見られる。前者の場合、成立は江戸初期となり、後者の場合は、極限は室町中期迄引き上げられよう。」（『図書寮叢刊資賢集　遺塵和歌集』の「『資賢集』解題」）

このように、『資賢集』についての基礎的研究は、橋本・八嶋の両氏によってほぼ完全になされ、『資賢集』についての問題はほぼ明らめられた感が強い。ところが、最近、本集の出典資料とされている『明題和歌全集』の成立について検討していたところ、『明題和歌全集』の基幹となった類題歌集『題林愚抄』を究明することができ、[2]『資賢集』も『題林愚抄』に依拠して成った私撰集ではないか、との臆測をもつに至った。そこで、このたび、『資賢集』を精査した結果、『資賢集』の最大の出典源は、実は、『明題和歌全集』ではなくて、『題林愚抄』である、との結論に達したのである。

かかる次第で、本稿は、『資賢集』の最大の出典源の闡明をとおして、『資賢集』の成立の問題に言及した拙い考察にしかすぎないが、大方の御叱正を賜わりたいと思う。

二

さて、『資賢集』が原拠資料から採録されたのではなく、類題歌集から採歌されていることは、

(1)天津空霞へたてゝ久堅の岩戸のせきをはるやこゆらん
（為定・五）

(2)風ふけは岸のはかし（マヽ）葉そよ〳〵（マヽ）と紅葉なかれぬ山川そなき
（曽禰好忠・一三一四）

の二首がいみじくも示唆している。なぜなら、(1)は、『新後拾遺集』の巻頭歌たる為定の

(3)天つそら霞へだてゝ久かたの雲居はるかに春や立つらむ[3]
（春上・為定・一）

の歌の上句と、『新拾遺集』の巻頭歌たる為藤の

(4)明け渡る空にしられて久かたの岩戸の関の春や越ゆらむ
（春上・為藤・一）

の下句が合体してできた歌であり、(2)も、『詞花集』収載の惟宗隆頼の

(5)風ふけば楢の枯葉のそよ〳〵と云合せつゝいつか散る覧
（冬・隆頼・一四四）

の上句と、『千載集』収載の後三条内大臣（公教）の

(6)くれてゆく秋をば水やさそふらん紅葉流れぬ山川そなき
（秋下・後三条内大臣・三七九）

の下句が合成した結果できた歌であるからだ。このように、(1)と(2)の歌は各々別種の歌集に収載をみる詠歌の上句と下句が合成されてできた歌で、かかる現象は、原拠資料から採録する際には絶対生じえない不祥事である。にもかかわらず、『資賢集』がかかる不可解な詠歌を収載しているのは、(3)と(4)、(5)と(6)の歌を連続して掲載する歌集から採歌したためであろう。その歌集が類題歌集『題林愚抄』と『明題和歌全集』であるが、残念ながら、両類題歌集とも当該歌を連続して掲げているので、いずれの類題歌集からの抄出歌であるかは明白にしえない。この点、「『資賢集』解題」[4]ですでに指摘されている、一四四六と一七七六の

(7)へはてはかひなしやとしをかさねてうえことの
　　は　ぞ
　　又あすしらぬ世をたのむかなつもらんはての命はかり
（基顕・一四四六）

(8)さゝかにのしるしもいさやいかならんなみたならてはくる人もなし　（蜘蛛・俊頼あそん・一七七六）

の二首も全く同様の事情にある。

そこで、『資賢集』と両類題歌集に共通する歌の本文異同について検討してみると、次の表(1)のごとき結果が得られる。

（表1）

号番	本文異同	資賢集	題林愚抄	明題和歌全集	原拠資料
五一四	○月　×花	○	○	×	○
八三九	○風ふけ（吹）は　×吹風に	○	○	×	／
一〇一七	○むしのこゑ　×蚤（きりきりす）	○	×	×	／
二一二六	○有とみしはも　×ありし計も	○	×	×	×

この表(1)によって、『資賢集』の和歌本文が一致するのは『題林愚抄』であることが知られると同時に、『題林愚抄』と『明題和歌全集』とが近似関係にあることも知られよう。

まず、一〇一七と二一二六の

(9)夜さむとは思わぬねやのむしのこゑかへまてきてそねをのみはなく　（虫声近床夜友・為遠卿・一〇一七）

(10)日にそへて霜かれ行は葛のはの有とみしはもえこそ恨みね　（寄寒草恋と云事を・俊恵法師・二一二六）

の二首のうち、(10)は『続古今集』収載の俊恵の詠だが、この歌の第四句は『続古今集』でも『資賢集』でも、「ありし計も」とあるので、『資賢集』の編者か書写者の誤記であろう。また、(9)は両類題歌集の集付によると、「康暦二内廿首」の由だが、この歌の第三句は、下句との関連からみれば、たとえば、『風雅集』収載の為兼の歌、「庭のむしは鳴きとまりぬる雨の夜のかべに音する蚤かな」（秋中・五五四）からも知られるように、「蚤（きりきりす）」の方が適切な措辞と判断されようから、これまた、『資賢集』の編者の誤記と推定されよう。

ところが、五一四と八三九の

(11)月とみて夜もやこえん夕暮のまかきの山にさけるうの花　（伏見院・五一四）

(12)風ふけはいまやまかきの荻のはもをのれそよきて秋をしるらん　（まかきの荻をよめる・為遠・八三九）

の二首は趣が異なるといわねばならない。まず、(11)は『続千載集』収載の伏見院の詠で、同集は「夕卯花を」の詞書を付しているが、この詞書からも明白なように、この歌の趣向の面白さは、「まかきの山にさけるうの花」を「月」に見立てたところに存するので、(11)の初句は「月とみて」の措辞でなければ不都合であろう。この点、『明題和歌全集』は「花とみて」とあるので、ここは『題林愚抄』からの採歌を示唆するであろう。次に、(12)は両類題歌集の集付によれば、「応安三内御会」歌だが、この歌の初句は「風ふけ（吹）は」でも「吹風に」でも歌意の上からは問題はないであろう。しかし、『資賢集』の本文が一致をみるのは『明題和歌全集』ではなく、『題林愚抄』の措辞であるから、これも『題林愚抄』に依拠した痕跡を残しているのであろう。

ここに、まず、『資賢集』の依拠した類題歌集は、『明題和歌全集』ではなくて、『題林愚抄』であることが示唆されるのである。

次に、「『資賢集』解題」が「明題を出典とすると目される歌でも、かなり作者が明題と異っている」として疑義を提出している、作者表記の問題について検討しよう。両類題歌集のいずれかから抄出されたと推定される詠歌の作者表記の異同について、当面の問題に限って表示したのが表(2)である。(5)

(2表)

番号	作者異同	資賢集	題林愚抄	明題和歌全集	原拠資料
一七六	○今出川隆義　×今出川院近衛	○	×	×	×
五二一	○よみ人しらす　△欠落　×顕季	○	△	△	×
六六五	○後宇多院　×後嵯峨院	○	○	×	○
六八一	○藤原成方　×(藤原)盛方(朝臣)	○	×	×	×
八二二	○ためつねの卿　×為家	○	×	×	×
九五二	○さねとし(実俊)　×実信	○	○	×	○
一〇八二	○源順　×躬恒	○	○	×	×
一七〇四	○宣方　×(従三位)為子	○	×	×	×
二〇一四	○としさた　×信定	○	×	×	×

ちなみに、表(2)の作者異同に関わる歌とその原拠資料を列挙すれば、次のごとくなる。

(13)吉野河こほりとけゆく岩なみのはやくも朝(ママ)はるかせそふく
(藤葉集・一七六)

(14)昔よりけふのみあれに葵草かけてそたのむ神のこゝろを(ちぎり)
(堀川百首・五二一)

(15)過にけり軒の雫はのこれとも雲にをくれぬ夕たちの雨
(新後拾遺集・六六五)

(16)岩間より落くる滝の白糸は結はて身をもすゝしかりけり
(千載集・六八一)

(17)わかなみたそよ又何と荻のはにあきかせふかは先こほるらん
(宝治百首・八二二)

(18)つまこひの秋のをしかの泪より結ひやそめしのへのしら露
(延文百首・九五二)

(19)月を待ゆみはりとしも云事は山のはさしているにそ有ける
(大和物語・一〇八二)

(20)庵結ふ秋の山田のひたすらにいとへやこれはかりそめの世そ
(玉葉集・一七〇四)

(21)遙なるいく草まくら結ひてかそのしたひものとけんとすらん
(六百番歌合・二〇一四)

この表(2)によって、『資賢集』の作者表記がかなり杜撰であることが知られるが、かような誤記も一応、類題歌集の導入によって説明はつく。すなわち、『資賢集』の作者誤記のうち、(13)は「今出川院近衛」の「院近衛」を「隆義」に、(16)は「盛方」の「盛」を「成」に、(21)は「信定」の「信」を「俊」に『資賢集』の編者が誤記したために、(14)は、両類題歌集が作者名を欠落しているのを、『資賢集』の編者が勝手に「よみ人しらす」と判断したために、(17)は両類題歌集の当該作者の二首あとの、(20)は直後の作者名を、『資賢集』の編者がうっかり目移りして叙したために生じた不祥事である。ところが、(15)(18)(19)の『資賢集』の作者表記は『明題和歌全集』のそれと符合しないで、『題林愚抄』のそれと一致しているので、この点から、『資賢集』の依拠した類題歌集は『題林愚抄』であることが推定されるのである。

そこで、『資賢集』は『題林愚抄』に依拠して撰集されているという視点から、「『資賢集』解題」で出典不明としているうちの、

㉒天河うきつのなみに彦星の妻むかへ舟やこくらし
（藤敦仲・七三四）

㉓浮しつみ世をうみ渡る海士を舟行ゑもしらぬ身に社有けれ
（寄舟述懐・伏見院・一四六九）

㉔まことかとましをし返しとふほとの人めの隙もなき契りかな
（忍契恋・今上御製・一八五六）

の三首と、『宝治百首』を出典としている、

㉕ひとりねはなかきならひの秋のよをあかしかねてやしかの鳴らん
（夜鹿・中納言資季・九五九）

の計四首に言及すると、この四首は、『明題和歌全集』には収載されず、『題林愚抄』にのみ収載されていることが知られるので、ここに、『題林愚抄』が『資賢集』の出典資料になっていることが推断できるのである。となると、「『資賢集』解題」で『六百番歌合』を出典としている、

㉖行あはんちぎりもしらすしのすゝきほのみし野へにまよひぬる
（尋恋・家隆・一八八〇）

の歌も、『明題和歌全集』にも収載をみるが、やはり『題林愚抄』からの抄出歌とみなさねばなるまい。

また、『資賢集』の一二〇八の

㉗秋ふかきまかきは霜のいろなから老せぬものとにほふしら菊
（籬菊をよめる・二品法親王覚助・一二〇八）

の歌は『続千載集』収載歌だが、この歌は、『題林愚抄』では「菊霜」と「籬菊」の歌題の例歌として二箇所に掲載をみているのに、『明題和歌全集』では「菊霜」の例歌としてのみ収録されているので、『資賢集』がこの歌に「籬菊」の題を付しているのは、『題林愚抄』の歌題を採録した痕跡を残すものにほかなるまい。

以上、和歌本文、作者表記、歌題表記、その他の観点から、『題林愚抄』と『明題和歌全集』とを比較検討した結果、『資賢集』の出典資料としては『明題和歌全集』は適切でなく、『題林愚抄』が正確な出典資料であることが明瞭になったであろう。

三

『資賢集』の最大の出典源が『題林愚抄』となると、『資賢集』五五八の「兼宗朝臣」の注記のみで、歌を欠落している箇所には、

㉘めつらしきはつねなれとも郭公あかぬなこりはうらみかれけり(6)
（題林愚抄・初郭公）

の歌があったと推定されよう。これで『資賢集』収載歌の全歌が知られるので、次に『資賢集』収載歌の出典一覧表を作成すれば、表(3)のごとくなる。(7)

出典資料	歌数		
題林愚抄	一三一一首	後拾遺集	一〇首
古今六帖	三九七首	重之集	八首
俊恵集	二〇四集	赤染衛門集	三首
頼政集	一四六首	行宗集	二首
好忠集	六〇集	兼盛集	二首
		長明集	二首
		詠千首和歌	二首

忠見集	一首
朝忠集	一首
元真集	一首
俊頼集	一首
古今集	一首
続古今集	一首
出典不明	二首
合計	二一五六首

（表3）

このうち、『題林愚抄』収載歌一三一一首については、集付その他によって原拠資料が知られるので、参考までにその点を付言すれば、次のとおりである。

千載集85首　玉葉集76首　六百番歌合・新古今集69首　新拾遺集64首　宝治百首63首　続千載集62首　続古今集60首　新千載集57首　金葉集48首　続後撰集46首　堀川百首45首　新勅撰集44首　続後拾遺集43首　続拾遺集42首　亀山殿七百首38首　白川殿七百首・新後拾遺集37首　新後撰集・延文百首27首　後拾遺集26首　長秋詠藻23首　堀川次郎百首22首　永徳百首19首　嘉元百首17首　風雅集14首　藤葉集12首　詞花集・伏見院三十首11首　千五百番歌合・新続古今集9首　拾遺集8首　建保二内歌合6首　古今集・寛喜女御入内屏風5首　木工権頭為忠朝臣家百首・現存六帖4首　建仁歌合・拾玉集・遠島御歌合・弘安百首3首　後撰集・建仁二内歌合・順徳院歌合・元徳二十五夜内裏五首・元徳二十九夜内御会・石清水歌合・永和二九十七御会・永和二九十七内御会・康暦二内廿首2首　経信集・散木奇歌集・彼岸御念仏会六首・女御入内御屏風・民部卿家歌合・建仁元十四・建仁二十四首・建保三歌合・右大臣家六首歌合・藤川百首・河合社歌合・宝治歌合・玉津島歌合・伏見院歌合・元亨三九十三仙内会・後宇多院十首・貞和四七夕御会・延文四正廿九・延文四七夕内御会・応安三内御会・新葉集・文安三七廿二内続歌・伏見殿千首・梶井宮会・内裏御会・内御会・御会・大和物語1首　出典不明9首[8]

一方、『資賢集』に五首以上採歌されている詠歌作者を列挙すれば、次のごとくなる。[9]

俊恵209首　頼政145首　貫之88首　定家65首　俊成62首　好忠61首　家隆56首　伊勢47首　俊頼42首　躬恒39首　読人不知36首　後嵯峨院31首　人麿29首　伏見院28首　基俊26首　深養父・後宇多院19首　素性・俊成女・匡房18首　資季・慈円・良経17首　為家・為世・為定15首　実教13首　友則12首　経信・公雄11首　後鳥羽院・実氏・俊光10首　有間皇子・重之・顕季・雅経・行能・藤原為経・信実・光俊8首　家持・赤染衛門・藤原顕仲・知家・実雄・為兼・基任・光厳院・道嗣7首　業平・遍照・忠岑・寂蓮・隆信・有家・長明・道家・亀山院・俊定・実兼・為明・為遠6首　興風・教実・源顕仲・顕輔・後鳥羽院下野・忠定・公相・基忠・花園院・兼綱・後光厳院5首

以上の整理によって、『資賢集』のおおよその性格が知られよう。まず、表(3)によれば、『題林愚抄』と『詠千首和歌』を除くならば、『資賢集』は、ほぼ源資賢の生存時期と重なるか、それより以前に成立をみた歌集からの抄出歌で撰集されているといえようが、『題林愚抄』収載歌の出典からみると、『資賢集』の収載歌は、『古今集』『古今六帖』あたりから、「文安三七廿二内続歌」「伏見殿千首」あたりまでの広範囲に及んでいることが知られよう。一方、『資賢集』収載歌人の傾向からみると、『資賢集』は、第一に、新古今時代ごろの歌人の詠歌を大量に採歌しているといえよう。歌林苑歌人の俊恵・頼政、『新古今集』に入集をみる歌人は枚挙にいと

まがないほどである。次いで、六歌仙から『古今六帖』収載歌人の歌数が目立つが、この中には、人麿・有間皇子・家持などの万葉歌人も含まれている。第三に、新古今時代以降では、後嵯峨院、伏見院、後宇多院の歌壇に属する歌人がほぼ満遍なく採られ、以後、『新続古今集』収載歌人にまで及んでいる。

これが『資賢集』収載歌人の主な動向であるが、この点から『資賢集』の性格に一言すれば、「『今』の歌よりは『古』を重くし、新古今集以後の著名歌人を尽している」(『和歌文学大辞典』)『新続古今集』の性格に通ずる側面を有しているといえようか。

四

それでは、『資賢集』の成立時期はいつであろうか。この点については前述のごとく、「『資賢集』解題」が、本集を原本とみた場合は江戸初期、写本とみた場合は上限を室町中期まで引きあげ得ると言及しているが、いずれにせよ、『資賢集』収載歌の最新の出典資料が『題林愚抄』であるから、『資賢集』の成立は『題林愚抄』の成立時期よりは以降となろう。その『題林愚抄』の成立時期を示唆するのは、『資賢集』収載歌の最新の歌、

(29)まこも草末葉の露も五月雨にまさる水野ゝあやめ引也
(曳菖蒲・資任・五九七)

(30)波かくる松のしつえも朽ぬへし日かすつもりのうらの五月雨
(浦五月雨・重賢・六三〇)

の二首で、『題林愚抄』の集付によれば、(29)は「文安三七廿二内続哥」、(30)が「伏見殿千首」であるから、まず、(29)の歌から文安三年七月二十二日以降の成立であることは動くまい。一方、(30)の「伏見殿千首」の成立については、工藤進思郎氏が「『夢の通ひ路物語』の成立追考」(『岡山大学法文学部学術紀要』第四〇号、昭和54・12)で、「文明十五年(一四八三)—まで引き下げておく方が」「より穏当な見解であるように思われる。」と言及されたが、私は、『題林愚抄』を出典資料にして成った私撰集『光俊集』の奥書に、「文明二庚寅年卯月上旬 西槐(ママ)藤臣 判」とある記事からみて、『題林愚抄』は文明二年ごろまでには成立していただろうと推定している。(10)したがって、『資賢集』の成立時期の上限は、文明二年ごろとみなして支障はないのではなかろうか。

なお、『資賢集』が書陵部に一本しか伝存せず、しかも、諸般の条件からみて原本の可能性があるとの見解については、「表紙裏の紙の『校合ヒ』という文字(11)」があること、詠歌作者のみ記して歌を欠落していること(28)の歌を推定した五五八)、また、一四三三の(31)行としをおしめは身にもとまるかと思ひいれてやけふを過まし
(一四三三)

の歌に付されている「前ニアリ」の肩注からみて、写本と考慮するのが穏当であるように思われる。なぜなら、三首前(一四三〇)に掲出済みの(31)の歌を、もし編者であるならば、三首後に掲載するというようなへまは繰り返さないだろうし、それがもし重出歌だと判明すれば、不掲載の処置ですむはずであるからである。

ともあれ、『資賢集』が原本であるか、写本であるかは、さらに今後の検討に委ねなければならない問題であろうが、いずれにせよ、本集が『資賢集』の原形態を忠実に伝えていることだけは確言できよう。となると、『資賢集』なる集名は編者その人による命名ということになろう。

それでは、本集は何故『資賢集』と命名されたのであろうか。この点については、本集に、

正月七日、人きて、すけかたに、わかなの歌よめるにやといひけれは

(32)里人は入日をかけて春の日に雪まのわかなつみかへる也　(七四)

の、資賢を作者と考えられる一首と、

人さそひきて、きた山へ花見にまかりけるに、所々の花さかりなるをみて　資賢

(33)遠けれと花のためにそ春はきぬけふは山路に日をやくらさん　(一三六)

(34)おもひやるかたこそなけれおさふれとつゝむ人めにあまるなみたは　(忍恋を・資賢朝臣・二一五六)

の計三首が収載されていることと関連があるのかも知れない。とくに、(32)と(33)は表(3)で示した『資賢集』収載歌のなかの唯一の出典不明歌であり、集名と何らかの関係があるように推定されるが、(34)の歌も集名付与の問題を示唆しているように思われる。というのは、(34)は『題林愚抄』収載歌だが、この一首のみ、『題林愚抄』の和歌配列順序を破って、巻末に配置されているからである。この配置は恐らく、編者の意図によるものと考慮され、したがって、巻末の詠歌作者の名をもって、編者は本集に『資賢集』なる集名を付したのではなかろうか。そして、『資賢集』なる集名は、春部巻頭の一行に「按察使大納言資賢朝臣撰集」とある記述が意味するように、私家集の謂ではなく、私撰集を意味している。この点、『光俊集』の奥書に、「右此一冊者先哲詠吟以所光俊朝臣心用粗集之云々」とある記述から、私は、『光俊集』を、『光俊集』の編者が光俊の立場に立って撰集したと推定したが[12]、この『光俊集』の撰集と軌を一にするように思われる。つまり、『資賢集』は、『資賢集』の編者が源資賢の立場に立って撰集した私撰集ということになるのではあるまいか。

それでは、何故、かかる『千載集』初出の歌人の名を冠した私撰集を撰集する必要があったのであろうか。まず、千載歌人・源資賢の立場に立って編者が『資賢集』を撰集したことの意味は、たとえば、「この集で頼政や俊恵を多数撰入した意識と通ずるように見受けられ[13]」、その歌林苑歌人たちの最重視していた詠歌態度が、「哥は題の心をよく心得べきなり」ということと、「歌はたゞ同じ詞なれども、続けがら・いひがらにてよくもあしくも聞ゆるなり[14]」ということであった点と関連があるように思われる。これは、いわば題詠歌をよむうえでの心構えであるから、この点から当面の問題に言及すれば、題詠歌をいかに上手によむかという認識がかなり意識され始めた時期の歌人（この場合資賢）の立場に立って、一種の題詠歌の手本たるべき撰集を企図した結果が、『資賢集』の編纂だったといえるのではなかろうか。『資賢集』収載歌人のなかで、歌林苑歌人の次に新古今歌人の多いこと、『古今六帖』収載歌人の多いこと、後嵯峨院歌壇に属した歌人から以降の歌人が多いことなど、いずれも題詠歌の観点から説明し得るし、何よりも、本居宣長をして、『排蘆小舟』で「初心の人題詠のよみ方おぼつかなくて困ることあり。それには題林愚抄といふものがよきなり」（日本歌学大系本）といわしめた『題林愚抄』からの抄出歌を『資賢集』が最大の出典源にしているのも、この点を裏付けるものであろう。

そして、これらの題詠歌の手本をもって『資賢集』を撰集したことの意味は、私家集名を冠する私撰集のほとんどが詠歌作者名を注記していないのに[15]、『資賢集』は詠歌作者名を注記していること、また、『曽丹集』を出典資料としている次の、

(35)かまひすくすたきし虫をいとひしに今はあらしの音そはけしき　(嵐・一三一五)

(36)露はかり袖たもぬれす神無月もみちは雨とふりにけれとも　(紅葉・一三一六)

(37)外山なる柴の立枝にふくかせのをときく時は冬そものうき　(風・一三一七)

(38)三室山木葉ふりにし朝よりあらはにみゆる四方の玉かき　(このは・一三一八)

の四首は同集には歌題表記がないのに、『資賢集』[16]では注記のとおり歌題表記がなされている点にうかがわれるように、『資賢集』の編者は、題詠歌の手本を例歌にして、類題歌集を編纂しようと企図したところにあったのではあるまいか。そして、かかる『資賢集』の編者の意図は、「古典和歌という概念の成立した時期」[17]以降の営為と考慮されようから、かような「伝統的文化の地方的・階層的拡大」[18]の時代にあって、このような撰集が出現したことは、その時代の必然的要請としての所産であったと考えられるであろう。

なお、『資賢集』の編者については、いろいろ臆測は可能であろうが、現在のところ、明確にしえないので、この問題は今後の課題にしたいと思う。

注

(1) 「中世私撰集解題(その三)」(『和歌文学研究』第十五号)から引用。

(2) 拙稿「『和歌題林愚抄』から『明題和歌全集』へ」(『花園大学研究紀要』第十号、昭和54・3)参看。

(3) 勅撰集からの引用はすべて国歌大観本による。

(4) 『図書寮叢刊　資賢集　遺塵和歌集』所収の「『資賢集』解題」を意味する。

(5) 「『資賢集』解題」では、395・714も該当例としているが、この二首は前者が『頼政集』、後者が『曽丹集』を出典資料としているので省略に従った。

(6) 国立国会図書館所蔵の元禄五年板行の『題林愚抄』(二〇二一・八六)から引用。

(7) 「『資賢集』解題」の「出典」の章の調査結果を訂正させていただくと、まず、「明題」を「題林愚抄」と改め、395を「頼政」へ、558・734・959・1469・1858・1880・2156を「題林愚抄」へ、714を「好忠集」へ、777を「俊恵集」へ、1170・1177・1775を「六帖」へそれぞれ入れ、360を「続古今集」とする。

(8) 歌番号は158・313・328・346・418・913・922・1028・1916のとおりで、為道5首、頓阿・為定・為重・御製(不明)1首。

(9) 「『資賢集』解題」と「資賢集作者索引」を参看させていただいた。

(10) 拙稿「松平文庫所蔵『光俊集』の成立」(『国語国文』昭和52・3)参看。

(11) 「『資賢集』解題」から引用。

(12) 注10に同じ。

(13) 注11に同じ。

(14) 日本古典文学大系『歌論集　能楽論集』所収の『無名抄』から引用。なお、島津忠夫氏「後鳥羽院歌壇と歌林苑」(『国文学』昭和55・

9）参看。

(15) 同種の私撰集では、伊達文庫所蔵『邦高集』に全歌ではないが、かなりの作者注記がみえる。

(16) 「『資賢集』解題」にこの旨の御指摘がある。

(17) 注11に同じ。

(18) 井上宗雄氏「南北朝・室町時代の和歌」（『講座日本文学6』昭和44・1）から引用。

〔付記〕 本稿をなすにあたって、多大の学恩を蒙った『図寮叢刊 資賢集 遺塵和歌集』の編集にあたられた、宮内庁書陵部の関係各位に深謝申しあげる。